

# 鮮やかな複色系スプレーカーネーション新品種 「ひたち 1 号」(仮称)栽培マニュアル

茨城県農業総合センター生物工学研究所・園芸研究所

## 1. 品種特性

- 1) 地色が浅黄橙色で、条斑と覆輪が明赤色の花色のスプレー系品種です。
- 2) 花が大きく、草丈、ボリューム感があります。
- 3) 開花始めは 12 月上旬で若干遅いが、2 番花の開花は早く、収量性は通常の栽培品種と同等です。
- 4) 冬場に低温で栽培すると孫芽が発生します。

## 2. 作型 (目標収量: 10,000~12,000 本/a)

月	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12
作型												
周年栽培							x	x				

( : さし芽, : 定植, x : 摘心, : 保温, : 加温, : 採花)

## 3. さし芽・定植

- 1) さし芽の培土は無病の保水性、通気性に富むもの(パーライト、砂、赤土など)を用い、挿し穂は発根剤で処理して、2~3cm 間隔で 2cm の深さに挿します。
- 2) さし芽後は苗床を地温 18~22、気温 15~20 を維持し、寒冷紗などを用いて 50~60%の遮光をします。灌水は苗床が乾かないように行いますが、ミストを用いる場合は過湿にならないよう注意します。
- 3) 発根後は、徐々に外気と日光に馴らしておきます。
- 4) フラワーネットは、定植の前にベッド上に 5 段まとめて配置しておきます。
- 5) 定植は出来るだけ浅植えにし、定植後十分に灌水します。遮光は天候を見ながら活着するまで行います。

## 4. 土壌改良・施肥

- 1) 土壌改良資材はリン酸、石灰などを主体にあらかじめ土壌全層によく混和し、基肥は全体の 3 分の 1 程度を施用しておきます(基肥は EC 値が 1.0ms/cm 以上であれば不要)。
- 2) 追肥は固形肥料を用いる場合は、1~2 ヶ月に 1 回の割合で置き肥とします。液肥を用いる場合は 7~10 日間隔で 200~300ppm の濃度で施用します。
- 3) 養液土耕栽培では適宜、土壌水分と生育ステージに応じた施肥を心がけます。

施肥例 (単位:kg/a)

成分	総量	基肥	追肥									
		6月	8月	9月	10月	11月	12月	1月	2月	3月	4月	
N	10.6	3	0.9	1	0.9	0.9	-	0.9	1	1	1	
P <sub>2</sub> O <sub>5</sub>	12.1	5	0.8	1	0.9	0.9	-	0.9	1	0.8	0.8	
K <sub>2</sub> O	8.1	0	2	1	0.7	0.7	-	0.7	1	1	1	

## 5. 栽培管理

- 1) 栽植密度は 1 m<sup>2</sup>当たり約 36 株が適当です。
- 2) 温度管理は最低気温 12~20 を目安に行います。ただし、冬場の低温は孫芽の発生を助長します。
- 3) 定植 2~3 週間後に、5~6 節を目安に生長点を浅く確実に折り取って摘心します。その後、生育が揃った側枝を 1 株当たり 3~4 本残すように整枝します。
- 4) 2 回目の摘心は、1 日目の摘心後に伸長した側枝 1~2 本を、9 月上旬までに 7~8 節で随時摘心します。
- 5) フラワーネットは伸長に応じて上げていき、マス目に正しくおさめます。
- 6) 頂花蕾は、大きさが大豆程度になったら摘除します。

## 6. 病害虫防除

- 1) 土壌消毒(薬剤、蒸気、熱水、太陽熱など)を行い、土壌病害虫の防除を徹底します。
- 2) 無病苗を用いるとともに、定植後も病害虫の予防的防除を徹底します。

## 7. 収穫・調整

- 1) 切り前、規格は販売先に応じたものとします。
- 2) 収穫は涼しい時間帯に行い、収穫後は鮮度保持剤で水揚げを行います。

問い合わせ先 生物工学研究所 果樹・花き育種研究室 電話 0299(45)8330  
園芸研究所 花き研究室 電話 0299(45)8341

